

キャリア教育を目的とした学校インターンシップの取り組み事例について

On Examples of School Internship Initiatives Aimed at Career Education

坪井恭紀・瀬尾賢一郎

I. はじめに

平成23年1月31日付中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」では、高等教育におけるキャリア教育の基本的な考え方について「高等教育においては、後期中等教育学校までにおけるキャリア教育の目標である生涯にわたる多様なキャリア形成に共通して必要な能力や態度の育成と、これらの育成を通じた勤労観・職業観等の自らの形成・確立を基盤として、高等教育が我が国の多くの若者にとって社会に出る直前の教育段階であることを踏まえ、学校から社会・職業への移行を見据えたキャリア教育の充実を目指すことが必要である」と示されている(中央教育審議会, 2011)。

また、平成27年12月21日付中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」では、「学生が長期間にわたり継続的に学校現場等で体験的な活動を行うことで、学校現場をより深く知ることができ、既存の教育実習と相まって、理論と実践の往還による実践的指導力の基礎の育成に有効」「学生がこれからの教員に求められる資質を理解し、自らの教員としての適格性を把握するための機会としても有意義」とあり、学校インターンシップの導入を勧めている(中央教育審議会, 2015)。

このように、教職を目指す学生にとって学校現場等での継続的、体験的な活動が求められている中で、本学の教職課程では早期学年における学校教育現場での体験活動に相当するカリキュラムは設定されておらず、4年次に実施される教育実習(2～3週間)が唯一の学校教育現場での実習科目となっていた。このことから、学生の学校教育現場における実体験の機会(実践の場)が不足していることは顕著であり、理論と実践の往還が起こりにくい環境であった事は言うまでもない。加えて、本学の教職課程の学生の特徴である「教員志望度は3年生が最も低い」(水崎 他, 2021)の先行研究のデータもあり、自信をもって学校教育現場に出ていくには学校インターンシップが必要不可欠ではないかと判断した。

試行的ではあるが2021年度前期に「コミュニティースクール」の一環としての位置づけで「学校ボランティア」¹⁾として周南市内の小中学校に7人の学生を送り出した。後期は16人に増員し行った。受け入れ校(配置校)からは概ね肯定的な意見を聴くことができ、周南市教育委員会教育部学校教育課(以下、市教委とする)、本学学務課がすぐにそれに反応を示し、

これを発展させていく考えで意見がまとまった。市教委、周南市小学校校長会、周南市中学校校長会、本学学務課、本学教職課程運営委員会がチームとなって、2022年度から「学校インターンシップ」の新科目開講の運びとなった。

そこで本稿では、この学校インターンシップでの体験が教職に関する職業観や自己適性の理解といったキャリア形成にどう結びついたかを考察するとともに、学生やインターン受け入れ校の学校長らからのコメントを頼りに、課題の模索と改善策の検討によって、これからの学校インターンシップの質的向上の一助としたい。

II. 「学校インターンシップ」開設までの経緯

2021年4月、本学の教職を目指す学生に学校教育現場を見せてもらう機会を模索し、周南市中学校校長会長に相談したところ、周南市内中学校校長会で説明をしてよとの回答を得た。4月最初の校長会において「地域協育ネットにおける学生の参画について」の要項を持参し説明した。数日後、筆者のゼミ生7人の配置校が決まった。こうして試行的ではあるが2021年度前期に「コミュニティースクール」の一環としての位置づけで「学校ボランティア」として周南市内の小・中学校に7人の学生を送り出した。

後期は希望する学生を募り16人に増員し行った。受け入れ校(配置校)からは概ね肯定的な意見を聴くことができ、ひとまずは安心した。

年度途中の10月にはこの様子を知った、市教委、本学学務課がそれに反応を示し、これを発展させていく考えで意見がまとまった。市教委、周南市小学校校長会、周南市中学校校長会、本学学務課、本学教職課程運営委員会がチームとなって、次年度から「学校インターンシップ」の新科目開講の運びとなった。

III. 「学校インターンシップ」実施までの準備

1. 開設までの準備

本学教職課程運営委員会を中心に科目「学校インターンシップ」のシラバスと年度最初の小学校・中学校校長会で説明用の要項を作成した。

2022年4月4日に小学校校長会で、4月6日に中学校校長会で、①ねらい ②実施期間 ③内容 等を示した実施要項を基に説明した。

市教委が、受け入れ校から出される「配置校決定までの書

類」と、①理念 ②履修生に対する指導について ③保険加入について等が含まれる冊子「受け入れに関するお願い」を作成した。

2. 学校インターンシップの概要（2022年度シラバスの内容：原文の抜粋）²⁾

表1のとおりである。

表1 2022年度 学校インターンシップシラバス（抜粋）

a.開講期間	通年
b.配当学年	2年生以上
c.単位数	2単位
d.時限	集中講義
e.授業区分	教職に関する科目（共通）
f.履修上の注意事項	教職課程履修者のみ履修可能。 中一種免・高一種免ともに「大学が独自に設定する科目」に算入されます。
g.授業のねらい・概要	中学校、高等学校の教諭を目指す学生が、学校で生活する児童生徒の姿や教職員の業務活動を観察するとともに、実務に対する補助的な役割を担うことを通して、児童生徒の実態と学校教育活動の特色を理解する。学校教育現場での授業、特別活動、学校行事、部活動など教員の日常業務を観察、体験し、教育活動の実際的、具体的理解を深める。
h.教育目標とこの授業科目の関係	本学の3つの教育目標のうち、特に[1]主体性を持った意欲ある人材を育成する、[3]現実的な知識と手法を備え、問題解決能力を持った人材を育成する、の2点に重点を置いています。
i.授業の進め方・指示事項	学内における「講義」と学外における「実践活動」の組み合わせで行います。学外における「実践活動」の日は固定されていません。授業は、周南市内の小・中学校を対象とした体育授業を運営することです。対象となる小・中学校の時間割により、必ずしも授業開講時間と同一時間にならないケースも生じてきます。成果報告を含めて2単位時間分の活動を行います。
j.標準的な達成レベルの目安	① 学校教育現場についての理解を深める。 ② 自分の適性を確認する。 ③ 教育界が求める能力・人物像を理解する。

(筆者作成)

3. 学生の履修登録

2022年4月5・6日の1・2年生履修ガイダンスにおいて教職課程学生に説明の機会を得た。

周南市内校長会での説明内容とシラバスの内容を説明し、4月15日の履修登録締め切り日を待った。履修登録学生は、教職課程学生2年生27人のうちの14人、3年生48人のうちの14人、あわせて28人であった。

4. 市教委学校教育課との事前打ち合わせ

4月26日、本学において市教委学校教育課の担当者と事前打ち合わせを行った。

周南市内の小学校27校中16校が、中学校13校中全校が受け入れを了承した。この日の協議内容は以下に示すとおりである。

- a. 学校インターンシップの進め方について
- b. 実施主体の確認
- c. 授業としての役割
- d. 期間の確認
- e. 実施日の確認
- f. 活動記録の提出について
- g. 手引書『「学校インターンシップ」について（訪問校へお願い）』の内容確認

IV. 「学校インターンシップ」授業および報告会の実施

1. 「学校インターンシップ」前期1回目授業（4月27日）

4月27日に履修登録を済ませた28人を集め、以下の手引書に基づいて説明及び確認を行った。

（手引書の内容）

- a. 希望している小・中学校の確認
- b. 配置校調整について
- c. 前期授業の流れについて
- d. 提出書類の確認
- e. 手引書の注意すべき事項の内容確認

2. 「学校インターンシップ」前期2回目授業（5月11日）

5月11日の開催日までに、履修学生の交通手段と校種希望を参考に担当教員で配置校を決めた（表2）。

表2 学校インターンシップ配置校（前期）

学校名	児童数			学校名	生徒数		
	R4.4.8.	2年生	3年生		R4.4.8.	2年生	3年生
徳山小	639		1	鼓南中	13		1
遠石小	376	1		太華中	380	1	
今宿小	367		1	岐陽中	669	1	1
夜市小	100		1	住吉中	187		1
岐山小	438	1		桜田中	161		1
桜木小	271	1	1	須々万中	113	2	
秋月小	327		1	周陽中	398	1	
鼓南小	9		1	秋月中	161		1
富田東小	492		1	富田中	567	1	
富田西小	607		1	福川中	184	1	
福川南小	197		1	熊毛中	340	1	
三丘小	44		1	鹿野中	42	1	
大河内小	132	1					
		4	10			9	5
		14				14	

(筆者作成)

この日の授業後は、配置校との打ち合わせ、実習になるこ

とから、詳しく説明し、かつ慎重に授業を進めていった。授業内容は以下のとおりである。

a. 配置校の確認

前期と後期で小学校と中学校の両方経験することを確認した。義務教育学校の2校種を経験することによって、幅広い年齢層の児童生徒と触れ合う機会が増えることからである。

b. 学校インターンシップのねらいの確認

「学校で生活する児童生徒の姿や教職員の業務活動を観察するとともに、実務に対する補助的な役割を担うことを通して、児童生徒の実態と学校教育の特色を理解する。」の内容を徹底した。

c. 配置校からの履修生に対する指導について

以下の6点について指導を行った。

- (1) 学校における守秘義務(身分をわきまえる、コンプライアンスに高い意識を持つ)
- (2) 学校経営・学級経営の方針(理解しようとする態度)
- (3) 学習指導(観察や参加の態度、教材研究などの的確な立案、指導技術)
- (4) 教育的資質(優れた人格と客観的価値の保持、専門的知識)
- (5) 児童生徒とのかかわりかた(望ましい人間関係、接触の機会)
- (6) 社会人としてのマナー(挨拶、礼儀、時間厳守など)

d. 学校における具体的な活動内容について

活動する内容の例示は以下のとおりである。

- (1) 授業観察や授業補助(履修生の運動能力を生かした師範も可)
- (2) 給食指導補助(履修生の給食費は自己負担)
- (3) 休み時間における児童生徒とのふれあい
- (4) 学校行事や特別活動等の運営補助
- (5) 部活動における指導補助
- (6) 教員の業務観察や補助(教材作成や簡単な採点等)
- (7) 校外学習引率補助(旅費が発生する場合、履修生が自己負担を承諾すれば可)
- (8) 週休日に行われる行事等、正規の訪問以外の活動については、履修生が希望すれば、ボランティアとしての訪問は可

e. 授業計画(前期・後期)の確認

表3を参照のこと。

f. 前期中間報告会・前期活動報告会の内容確認

実習のほかに、中間報告会や活動報告会があることを伝達した。

g. 守秘義務

学校インターンシップ履修生として身分をわきまえること(児童生徒とのSNSの禁止、TPOをわきまえる等)、また守秘義務等コンプライアンスに高い意識を持つこと等を徹底した。

h. 保険加入について

学生教育研究災害傷害保険付帯賠償責任保険に一括加入している。学校インターンシップ中に他人にケガを負わせたり、他人の財物を損壊したりすることにより被る法律上の損害賠償を補償する。

i. 成績判定について

最終活動報告会終了後、本学の規定にのっとって評価を行うことを確認した。

j. 提出書類と締め切り日の確認

すべての書類は周南市教育委員会学校教育課に5月23日締め切りで提出することを確認した。

3. 「学校インターンシップ」のスタート

5月16日～20日の期間に配置校に出向き、打ち合わせを行った。

主な内容は、①実習担当教科 ②実習曜日・時限 ③服装 ④交通手段 ⑤守秘義務である。

そして、5月23日から履修生が打ち合わせた日に学校インターンシップが始まった。

表3 学校インターンシップ授業計画表

	予定時期	内 容
	(週単位)	
前 期	5/16～	学校訪問(あいさつ・訪問予定打合せ)
	5/23～	① 90分を1単位として、5単位の訪問
	5/30～	② ※前期合計10単位であれば、まとめ取りも可
	6/6～	③
	6/13～	④
	6/20～	前期中間報告会 ※訪問なし
	6/27～	⑤ 90分を1単位として、5単位の訪問
	7/4～	⑥ ※前期合計10単位であれば、まとめ取りも可
	7/11～	⑦
	7/19～	⑧
後 期	7/25～	活動報告会 ※訪問なし
	10/3～	学校訪問(あいさつ・訪問予定打合せ)
	10/17～	① 90分を1単位として、5単位の訪問
	10/24～	② ※前期合計10単位であれば、まとめ取りも可
	10/31～	③
	11/7～	④
	11/14～	⑤
	11/21～	後期中間報告会 ※訪問なし
	11/28～	⑥ 90分を1単位として、5単位の訪問
	12/5～	⑦ ※前期合計10単位であれば、まとめ取りも可
12/12～	⑧	
12/19～	⑨	
1/10～	⑩	
1/16～	活動報告会 ※訪問なし	

(本学担当者と市教委との打ち合わせを基に市教委が作成)

4. 前期中間報告会(6月22日)

前期中間報告会を周南市教育委員会学校教育課長と同主幹をお招きして下記のとおり実施した。内容は以下のとおりである。

a. 「中間報告会振り返りシート」記入

- b.グループ（6人）ごとにディスカッション
- c.グループの代表が報告
- d.周南市教育委員会学校教育課長講演

a.の「中間報告会振り返りシート」の設問は以下のとおりである。

表4 前期中間報告会振り返りシートの設問

Q:学校教育現場に入り、児童生徒とかがかわる中で感じたこと
Q:教員のサポートをすることによって気づいたこと
Q:どのような事前準備が必要だったか

(筆者作成)

以下、履修生のコメント（抜粋）を示す（【 】は履修生の配置された校種）。コメントは設問に対応しておらず抜粋したものである。

【小学校】

- ・わからない児童に対して、どこがわからないのかを聞いて、児童に考えさせることができた
- ・先生たちは頑張っていたり、クラスのために動いていた
- ・小学校では児童のやる気を引き出す声掛けが必要だと思った
- ・児童が日々成長していくので一人一人のレベルに合わせた臨機応変な指導が必要
- ・コミュニケーション能力と膨大な知識および指導力の準備が必要
- ・小学校では1年生と6年生ではできることがかなり違うのでそれを事前に学習しておくべき
- ・教員は業間にも連絡帳のチェック等で休憩する暇がない
- ・声掛けのタイミングが難しい
- ・普段から挨拶や正しい言葉遣いが大切

【中学校】

- ・教員が学校にいるときは常に生徒のことを考えていた
- ・コロナ禍により人との交流が制限されていることが不憫に感じた
- ・実際に現場を体験することで教員を目指す気持ちが強まった
- ・教員の方々ともコミュニケーションをとる必要がある
- ・教員はどの生徒に対しても同じ態度で接していた
- ・生徒との距離感が近くなりコミュニケーションをとることができた
- ・教員の発問に対して生徒と一緒に考えると発想や回答に面白さを感じた

- d.の周南市教育委員会学校教育課長講演では
 - ・周南市が学校インターンシップに期待するもの
 - ・義務教育における教育の在り方について

の内容で講話があった。

5. 前期活動報告会（8月9日）

前期終了時の報告会を実施した。内容は以下のとおりである。

- a.「報告会振り返りシート」記入
- b.グループ（6人）ごとにディスカッション
- c.グループの代表が報告

a. の報告会振り返りシートの設問は以下のとおりである。

表5 前期活動報告会振り返りシートの設問

Q:学校教育現場に入り、児童生徒とかがかわる中で感じたこと
Q:中間報告会の振り返りを踏まえその後取り組んだこと
Q:教員という仕事に対するの職業理解を深められたところ
Q:前期の課題に対して今後の取り組み予定

(筆者作成)

以下、履修生のコメント（抜粋）を示す（【 】は履修生の配置された校種）。コメントは設問に対応しておらず抜粋したものである。

【小学校】

- ・教員は一人一人の意見を大切に否定していないことに気が付いた
- ・自分にはICT機器活用能力が足りていない
- ・児童ができるようになったことについて教員は全力で褒めて成長を促している
- ・自分から児童に話しかけると何かしらリアクションをくれ、距離が近づく
- ・授業の一部しか見ることができず教員の職業理解までいかなかった
- ・一人一人を育てるという責任ある行動が必要
- ・授業準備をしっかりしている教員の授業はやはり面白い
- ・小学校の教員は児童のやる気を引き出す言葉遣いが必要
- ・教員になっても学び続けることが山ほどある
- ・教員の表情が、児童の下校前後で変化していて必死さが伝わってきた
- ・サポートするときは、自分で答えまでたどり着けるように、ヒントを与えずなかった
- ・児童と教員の間に信頼関係が出来上がっていた
- ・たくさんの児童を同時に見るので観察力や注意力が必要
- ・高学年は自分からかわる必要がある
- ・小学生の成長は早く、日々様々な変化を感じることがで

きた

- ・一番大切なのはコミュニケーション
- ・教員が一言注意すると児童は一気に集中モードに切り替わった
- ・児童を指導するときには声質や雰囲気は全く違った
- ・常に責任を伴う仕事だと感じた

【中学校】

- ・多種多様な生徒の「育ち方」を重視し指導すべき
- ・理論的と実技的な内容を交互に行いインプットとアウトプットを意識しながら取り組んだ
- ・教員がすべて教えるのではなく生徒に考えさせて個の力を引き出そうとしていた
- ・生徒が一人にならないように教員は観察していた
- ・コミュニケーション能力と行動力を身に付けたい
- ・運動会の結団式に立ち会うことができ貴重な体験だった
- ・インターネット検索して技能習得のコツを言語化できるように勉強した
- ・生徒一人一人が「みんな違ってみんないい」、その良さを伸ばしてあげるのが教員の仕事
- ・教員は生徒と多くの時間を共有するので、変化や成長を間近で感じることができる
- ・一度声掛けすることでアドバイスを求めてくる生徒が増えた
- ・アドバイスをする場面で、教え方、伝え方、言葉の使い方など、その生徒にわかりやすい方法が必要
- ・教員は「生徒のために何ができるか」を常に考えている
- ・生徒の達成と一緒に味わうことができるのが教員の一番の魅力
- ・教員同士で授業時間外に「楽しい授業づくり」について話し合いを設けていた
- ・資料作りをたくさんしていた

前期が終了して、履修生の振り返りコメントが集約された。

「学校の主役である児童・生徒を中心に据えて、すべての教育活動を展開している。」「児童・生徒とのコミュニケーション、人間関係、信頼関係を構築させる必要性を感じた。」「児童・生徒に声かけすることによってやる気を引き出していた。」などの学校教育現場に入らないと見るできない体験ができたようである。

また、授業づくりに関して、下準備をしっかりとっておけば楽しい授業につながる。その準備こそ多忙につながっている。といった現在話題となっている教員の激務の一端を垣間見た履修生もいた。

前期だけでも多くの学びがあったようだ。

6. 前期学校インターンシップ配置校からの振り返りコメント（抜粋）

前期お世話になった学校に担当の2人で訪問し、各校長から以下の振り返りコメントが得られた。

【小学校】

- ・社会人として基本的な挨拶ができていた
 - 日常的なあいさつ
 - 報告等のあいさつ
- ・少人数の学校で子どもと一緒に活動してくれたことが児童にとってもプラスの経験
- ・小学校教育や現場のことについて知りたいことなどを事前に準備してインターンに臨んでほしい
- ・気づいたことや知ったこと、学んだことなどをしっかりまとめることが経験の蓄積
- ・学校としては長期間、長時間にわたって関わってもらいたい
- ・学校行事などへの参加も期待したいところ
- ・個人情報取り扱いや教師としての守秘義務については、細心の注意を払ってほしい
- ・いろんな学年の授業補助に入ってもらい、大変助かった
- ・児童にとっても実りある機会となった
- ・児童に対する接し方がとても自然で、子どもたちからも大変人気であった

【中学校】

- ・本校教員としっかりコミュニケーションを取りながら、主体的にインターンに臨んでいた
- ・周りからの指示を待つのではなく、わからないことは積極的に尋ねていた
- ・体育祭・文化祭 etc イベントにぜひ手伝い、参加、観戦しに来てもらいたい
- ・「人」は「人」が育てる この仕組みを勉強してほしい
- ・学校教育現場にいることによってはじめて発見できることがある
 - 「授業づくり」「チーム学校」「保護者との連携」「地域との連携」「コミュニティースクール」「道徳教育」
- ・何を手伝ってよいかわからない場合は、授業の最初に「めあて」「ルーブリック」を示されるのでそれを参考に
 - にする
 - ・「自ら進んで」でないと身につかない
 - ・学校の業務の中には授業や生徒指導だけではなく、書類作成、コピーや印刷といった事務的な作業があることも知ってほしい

配置校の校長から多くの振り返りコメントが寄せられた。

「一緒に活動することによって児童・生徒が喜んでいた。」「教育効果が上がった。」「授業補助をしてもらい助かった。」「負担軽減につながった。」など履修生が児童・生徒と距離感が近いことや体力があることが学校教育現場でも役立っているとの指摘だと解釈する。

また、「授業外での仕事が多いことや守秘義務の必要性など、学校教育現場の様子を知る意味では有効ではないか。」と教員の厳しさも知ってほしいとのコメントも寄せられた。

7. 「学校インターンシップ」後期1回目授業（9月28日）

前期の振り返りをもとにして後期オリエンテーションを、9月28日に、学校インターンシップに関係する内容も含めて授業を行った。授業内容は以下のとおりである。

- a. 前期配置校校長からの振り返りコメントの説明
振り返りコメントをまとめたプリントを示して説明した。
 - ・2コマ連続で実習することが効率的
 - ・「めあて」「目標」「ルーブリック」を参考に実習
- b. 後期の日程確認
- c. 後期の手続き
新たに必要となる書類の提出について説明した。
 - ・提出書類
「令和4年度 集中講義 学校インターンシップ（後期）について」両面印刷
「令和4年10月～令和5年1月 学校インターンシップ活動記録表」3枚
- d. 配置校の確認
前期と後期の配置校の校種を入れ替えて行うため、前期に配置された学校の学生と後期に配置された学生との情報交換会を実施した。

8. 後期中間報告会（12月14日）

後期中間報告会を下記のとおり実施した。なお、グループ編成は校種別とした。内容は以下のとおりである。

- a. 「中間報告会振り返りシート」記入
- b. グループ（3人）ごとにディスカッション
- c. グループの代表が報告

a. の中間報告会振り返りシートの設問と履修生のコメント（抜粋）は以下のとおりである。

- Q: 学校教育現場に入り、児童生徒とかわる中で感じたこと
- ・児童の考えを引き出すために発問を用いて学習支援ができた
 - ・児童にわかりやすく教えたいことを言語化するのが難しい
 - ・わからない問題の答えではなく解き方を教えるようにした
 - ・学校行事を通して教員の準備が多いことに気づいた

Q: 小学校と中学校の相違点

- ・中学生に比べ小学生は褒めることが多くなると感じた
- ・小学校は年齢差が大きいので目配り気配りが特に重要
- ・体育に関しては小学生のほうができるかどうかに関係なく挑戦しようとする姿勢がうかがえる
- ・小学生のほうがわかりやすくゆっくり話さないといけない
- ・中学生は自分たちで考えて行わせる活動が増える
- ・小学生と中学生とは距離感が違う 小学生のほうが近い

Q: 自身の課題に対して今後の取り組み予定

- ・児童の表情やペンの進み具合を見ながら声かけ方の工夫やモチベーションを高める教え方をしていくことが課題
- ・支援を必要としている児童生徒に対するかわり方が課題
- ・授業内容に対する知識・技能が足りないと感じた
- ・常に社会と関係づけた指導を行えるようにしたい するために、日ごろからニュースや新聞を見て準備をする必要がある

9. 活動報告会（2月7日）および履修生へのアンケート調査結果

履修生を対象に、「学校インターンシップ」が履修生にとってどのようなものであったか、また、どのような経験・学びが得られたかを知るためにアンケート調査を実施した。

アンケート調査は、「前期の学校インターンシップについて」「後期の学校インターンシップについて」「全体について」の3項目、計37の設問から構成され、配置校での活動時間・内容、児童・生徒との関係性、授業における学び、満足度について選択肢からの回答を、また、年間の振り返りとして、学んだことや新たに発見したことを「自由記述」にてコメントを求めた。

調査の実施にはアンケート調査用紙および Google 社が提供する Google Forms を用い、著者および研究協力者から調査の内容と回答フォームの URL を履修者全員に周知し、2月7日の活動報告会の当日中に回答するように依頼した。

依頼にあたっては、アンケート調査用紙と回答フォームの冒頭および Web における連絡の文面の双方において、本調査の目的および概要を記し、回答協力は自由意志により行うこと、回答に協力しない場合にもいかなる不利益も受けないこと、調査目的に応じて集計されること、個人としての回答が公表されることは一切なく、プライバシーは完全に保護されることの説明を明記し、これらの説明について同意した場合にのみに回答するよう依頼した。

なお、アンケート調査の回答については、活動報告会に欠席した2人を除き、26人の回答協力が得られた。

アンケート調査における履修生の「自由記述」振り返りコメント（抜粋）は以下のとおりである。

【学んだこと】

- ・学校をチームとして考えるコミュニケーション能力の必要性
- ・授業準備に多くの時間を割いている（授業本番2割、授業準備8割）
- ・授業準備ができている授業は児童生徒を引き付けることができている楽しい授業展開
- ・教員になっても学び続けなければならない
- ・教員という仕事は常に責任が伴う
- ・教員は児童生徒と多くの共有時間があり、変化・成長を

一番近くで感じられる

- ・児童生徒の達成と一緒に味わうことができるのが一番の魅力

【新たな発見】

- ・やる気を引き出す声かけが必要
- ・教員の多忙さ 授業外も準備等で休む暇がない
- ・教員の発問に対して生徒と一緒に考えると、発想や回答の面白さを感じられた
- ・児童ができるようになったときに教員は全力で褒めて成長を促している
- ・児童と同じ目線で話す児童から話しかけてくれる

10. アンケート調査の結果について

学校インターンシップの最終報告会において、「学校インターンシップの満足度」について尋ねた(表6、7)。その結果、「学校インターンシップの満足度」については、前後期ともに概ね満足傾向の回答が得られた。

この結果を履修生の自由記述によるコメントと照らし合わせると、まず1つ目として履修生自身が児童や生徒、また教員とのコミュニケーションを通じて関係構築に至った点に関連しているのではないかと考える。「生徒との距離感が近くなりコミュニケーションをとることができた」「一度声掛けすることでアドバイスを求めてくる生徒が増えた」などのコメントにもあるように、授業や休み時間など様々な時間において、多くのコミュニケーションを取ったことにより、学校内における自身の受容感が満たされ、それが満足度の高さにも繋がっているのではないかと考える。またその経験は、教育現場におけるコミュニケーションは職業特性として特に重要であることに気づく機会になったことも想像できる。

2つ目としては、授業補助者の立場として教育活動の一端を担い、その経験を通じて児童や生徒の理解に繋げることができたという達成感からくるものではないかと考えられる。

「わからない児童に対して、どこがわからないのかを聞いて、児童に考えさせることができた」「児童の考えを引き出すために発問を用いて学習支援ができた」などのコメントにもあるように、様々な授業科目に対して授業補助者という立場で児童や生徒と関わる中で、学習内容を理解させるということは容易ではない。ましてや相手が小学校低学年くらいであれば、伝え方一つとっても簡単なことではない。学校インターンシップでは、児童や生徒に寄り添いながら学習支援を行う機会が与えられただけではなく、その求められた役割を果たすことができたことによる達成感から満足度につながったのではないかと推察される。

3つ目としては教職の仕事に触れ、多くの学びを得るに至ったという点ではなからうか。「教員は一人一人の意見を大切に否定していないことに気が付いた」「授業準備をしっかりしている教員の授業はやはり面白い」「児童にわかりやすく教えたいことを言語化するのが難しい」などのコメントから、授業者の立ち振る舞いなどに接する機会を得たことは、本来、

教職に就くことを希望する履修生にとって、様々な刺激を受ける貴重な経験の場になったに違いない。そういう点からも、教員の仕事内容を将来の自分事として捉え、得られた学びや気づきが満足度に影響したものとする。

また、「4月時点との教員志望度比較」については、4月時点に比べて約7割の履修生の教員志望度が上がったとの結果が得られている(表8)。このことは、無理難題に対しても向かっていき、結果を残せる自信がついたことと、教育の醍醐味を肌で感じる事ができた表れだと推測する。

また逆に、実際に児童・生徒・教員の姿を目の当たりにして自分の将来を想像してみた結果、結びつかない履修生がいることも事実である。実体験をとおして、自分の理想としていたものと現実とがかけ離れていて、自信喪失になったと考えられる。

表6 前期の学校インターンシップに対する満足度

n=26

項目	人数	%
1 大いに満足	13	50.0
2 ある程度満足	13	50.0
3 あまり満足できなかった	0	0.0
4 全く満足できなかった	0	0.0

(アンケート調査結果を基に筆者作成)

表7 後期の学校インターンシップに対する満足度

n=26

項目	人数	%
1 大いに満足	14	56.0
2 ある程度満足	10	40.0
3 あまり満足できなかった	1	4.0
4 全く満足できなかった	0	0.0

(アンケート調査結果を基に筆者作成)

表8 現在の教員志望について4月時点と比べてどうか

n=26

項目	人数	%
1 ぜひなりたい	14	53.8
2 できればなりたい	4	15.4
3 迷っている	6	23.1
4 あまりなりたくない	2	7.7
5 全くなりたくないと思わない	0	0.0

(アンケート調査結果を基に筆者作成)

11. 配置校からの意見収集(抜粋)

配置校のうち、小学校1校、中学校5校、および市教委から「受け入れ校としての感想」「次年度に向けての課題」「学校インターンシップまでに備えておいてほしいこと」「その他」

の4項目について聞き取り調査を実施した。

調査にあたっては、本調査の目的および概要を伝え、回答協力は自由意志により行うこと、回答に協力しない場合にもいかなる不利益も受けないこと、調査目的に応じて処理されること、個人としての回答が公表されることは一切なく、プライバシーは完全に保護されることの説明をし、これらの説明について同意した場合にのみに回答するよう依頼した。

得られた回答の内容は以下のとおりである。

Q: 受け入れ校として年間通しての感想

【小学校】

- ・教員を目指すなら長期にわたってやればよい 1年生の後期から始めてもよいのでは
- ・学校教育現場で経験することこそが大切
- ・児童は遊んでくれる相手を欲している

【中学校】

- ・小規模校なのでなおありがたい
- ・小学校では人間関係が固定される傾向にある それに変化をもたらせてくれた
- ・一緒に遊ぶ、清掃、授業参加 いずれも生徒が喜んでいる
- ・学生の意欲が感じられた
- ・生徒とのかかわりがよい
- ・中学校としては働き方改革に有効（教員の精神的や肉体的負担軽減につながった）
- ・運動会の準備は嫌がらずやってくれた くい打ち・ロープ張り・給食・その他手伝い
- ・向学心が高い
- ・専門教科以外にも興味を示した
- ・声掛けのタイミングが難しそうだった

【市教委】

- ・学校インターンシップで教育現場に入るのをお互いにありがたい
- ・年代が近いので児童生徒が喜ぶ

Q: 次年度に向けての課題

【小学校】

- ・低学年や支援学級とのかかわりによって何が支援できるのかがわかる（内面をみとる練習）

【中学校】

- ・教科以外での学びも必要（他教科、清掃、給食、児童生徒とのふれあい）
- ・半日より1日中いればより効率的
- ・学校から簡単な評価をしてもらえばよいのでは
- ・これからはICT機器を使つての指導が求められる
- ・1回の訪問で90'×2コマとる（1~4限・給食・昼休み）児童の素の部分を観させる
- ・事前打ち合わせの中で、インターンシップのプログラムで何を体験したいかを伝えていただき、担当教員や教科教員と実際の活動について計画を立てたうえで、

実施するとよい

- ・授業は無理だが、何をしたいか（含：オプション）伝えてくれれば対応する ex: 社会で資料提供、プレゼンテーション資料づくり etc

【市教委】

- ・学校教育現場を見て教育に魅力を持ってもらう
- ・教員を目指す学生を増やし、教職を目指してほしい
- ・小学校の現場を見て目指してほしい
- ・成果を検証することによって、実施前との意欲の変化を見る

Q: 学生にインターンシップ（職業理解）までに備えておいてほしいこと

【小学校】

- ・児童心理の勉強
- ・小学校・中学校のカリキュラムを勉強

【中学校】

- ・守秘義務
- ・コミュニケーション能力
- ・事前報告の習慣（欠席・遅刻）信用問題
- ・個人情報漏洩 特に職員室内
- ・ICT活用もし現役合格したなら4月からいきなり一人前使えるようになっていたら武器 職場に入ってから楽
- ・児童生徒とのかかわりから人の動きを観察する力が必要
- ・インターンシップであれ、生徒にとってみれば「先生」となるので、自覚や心構えについて、大学で事前にある程度習得させてほしい

【市教委】

- ・インターンシップ期間終業後にボランティアとして参加してほしい
特に学校行事：体育祭、文化祭、部活動 etc
- ・学校インターンシップを経験してみて、それを受け止め、考えさせて、自らの意思で動けるようになってほしい

Q: その他

【小学校】

- ・小一大連携の組織を作る
- ・インターンシップ・教育実習・ボランティア＝小一大連携のうちの一つ
- ・教員採用試験に合格したら採用前のインターンシップが必要

【中学校】

- ・学校インターンシップは必要なこと どこもやるべき
- ・1年間の流れがわかる（教育実習3週間とは違い意味がある）
- ・学校行事など季節感がある 中学校は2週間に1回の割合で行事がある（小学校はそれほどでもない）

- ・中学校は学校行事が中心 小学校は授業が中心
- ・表現力・プレゼンテーション能力・発表力（アウトプット）など中学生は行事によって伸びる
- ・部活動支援など、より大学と連携していきたい
- ・特別支援の子供に寄り添うことができる
- ・学生同士で学び合い・引継ぎをする
- ・アンテナを立てている教員はかかわり方がうまい 困っている生徒に寄り添える
- ・教員の仕事は人のかかわり 能力（学力）の高低は関係ない
- ・Win-Winの関係にしたい

【市教委】

- ・部活動でのかかわりをもっと増やしてほしい 周南市議会でも取り上げられている

履修生に対する多くのコメントを得ることができた。大きく3つに分類することができる。1つ目は教員の肉体的・精神的な負担軽減としての役割である。履修生から教員を見た感想や教員の様子から、保護者対応、事務作業、部活動指導などが教員の多忙を極めているとのことであり、授業外での時間に多く費やしていたことに気づいたようだ。勤務時間中も含めて教員は休憩時間をほとんどとらず、児童生徒のために時間を使っている。加えて、プレッシャーとストレスと真剣に向き合いながら、の状態である。少しでもその軽減に手を貸してほしい、との学校教育現場での声が聞こえてきそう。したがって、履修生のマンパワーに期待し、働き方改革との関係性も見逃せない。

2つ目は、履修生を職業人として、未来の教員として、完成度の高い、そして、即戦力として使える社会人・教員としての資質・能力を持ち合わせることに期待ではなかろうか。小学校は一つのクラスの全業務をほぼ任されるクラス担任制、中学校は自分の専門教科を一人で担当する授業形態が多くみられる。つまり、これには責任が大きくなってくるという現れ以外の何物でもない。何とかして自分たちの仲間として、即戦力として迎え入れたいとの教員の温かい気持ちだと解釈できる。

3つ目は、小学生や中学生と大学生との異学年交流という点である。「児童は遊んでくれる相手を欲している」「一緒に遊ぶ、清掃、授業参加などいずれも生徒が喜んでいる」など教育現場からのコメントにもあるように、異学年間での交流が児童や生徒にとって重要であると考えられる学校も多く、その機会として学校インターンシップが機能していたというコメントがみられた。小学生や中学生にとって大学生はお兄さんやお姉さんのような存在であり、これらの世代の人たちとの交流は成長への憧れを抱く機会になると考えられる。また授業や休み時間、清掃時間など様々な時間を共有する中で、何かを教えてもらったり、一緒に遊んだりする経験は、子供自身の異学年交流に対する価値観を変えるだけでなく、将来の進路に興味関心を持つきっかけともなり得ると考えられる。この点は、教育現場からの要望として挙がっていた「教科以外

での学びも必要（他教科、清掃、給食、児童生徒とのふれあい）」という点からも、その重要性を読み取ることができる。

V. まとめ

1. 学校インターンシップによるキャリア形成について

本学が目指す「学校インターンシップ」のねらいは、学校教育現場での児童生徒の姿や教職員の業務内容を観察するとともに、授業、特別活動、学校行事、部活動などの教員の日常業務を観察、体験し、教育活動の実際的、具体的理解を深めることである。この活動を通して、教育界が求める能力・人物を理解したり、自分の適性を確認したりすることを達成すべき事項として挙げている。

「学校インターンシップ」を終え、教員という職業に関する魅力や憧れに関する事項、また、学校教育現場の大変さについて履修生から多くのコメントが寄せられた。

履修生がこのねらいの通り年間を通じて学習できたかどうかについて、振り返りコメントやアンケート調査結果によると、履修生と児童生徒とのふれあい、児童生徒と教員のやり取り、教員の多忙さ、などの学校教育現場での様子に関しては概ね理解できているようだ。しかし、ただの憧れとしてではなく、職業人としての教員として、教育界の求める適性が自身にあるかどうか、明確な表現をしている履修生は多くないように思える。

大学側からの期待は、「学校インターンシップ」で成果を上げることが最終目標ではなく、3年生での模擬授業や4年生での教育実習での実践に結びついてほしいというものである。「学校インターンシップ」さえ経験していれば大丈夫という考えでは進歩が止まってしまうあまりにもったいない。この経験を活かし「学校インターンシップ」は教職課程の途中の体験としてとらえ4年間を通しての系統的なキャリア教育の完成を目指したい。

2. 「学校インターンシップ」が履修生の自信につながったか

履修生の振り返りでは、「教員になりたい思いがさらに強くなった」「学校教育現場での自分が役に立っている実感がある」「教育の醍醐味を肌で感じる事ができた」などの自信を持つことができたコメントが見受けられた。また逆に、「コミュニケーション能力と膨大な知識および指導力が必要」「教員は休憩する暇がない」「常に責任を伴う仕事」などの予想以上に教員の大変さを感じた履修生もいた。

本学の教職課程の学生の特徴である「教員志望度は3年生が最も低い」（水崎 他、2021）に結びつく要因の一つであるとも考えられ、次年度以降、満足感が得られ自信につながっていくような「学校インターンシップ」を展開することでこの課題を克服していく必要があると考える。

3. 工夫による効果的な「学校インターンシップ」

今年度は初年度ということもあり、すべてにおいて模索の連続であった。来年度以降より学習効果の上がる有効な「学

校インターンシップ」の構築が求められる。

- a. 報告会の内容の工夫
- b. 提出書類の簡素化
- c. 振り返りシート作成の必要性
- d. 履修生の科目履修方法による配置校での滞在時間確保
- e. 事前研修の必要性

a.の報告会に関しては、履修生だけの情報交換会の形式をとっていた。これに加えて、市教委からの激励、小・中学校教員からの指導助言などを取り入れて、より学校教育現場の経験に基づいた生々しい情報交換ができればお互いWin-Winの関係が成立すると考える。

e.の事前研修に関しては、配置校との打ち合わせから戸惑う履修生が見受けられたので、打ち合わせる事項を明確にさせることと同時に、実習一日目から迷うことなく自ら進んで動くことができるようにすることが重要である。特に、守秘義務やSNS対応は、今の時代教育界では必ずついて回る遵守事項であると同時に、職業人としても同じことがいえる重要課題である。

4. 今後の方向性について

公立大学法人周南公立大学設立目的には、「周南地域における知の拠点として、公正な社会観と正しい倫理観の確立を基にした「知・徳・体」一体の全人教育を通して総合的かつ専門的な知識、学術を教授研究し、世界的視野と広く豊かな教養を有し、地域に新たな価値を創造する人材を育成するとともに、地域との連携を深め、地域の政策課題の解決や活力豊かなまちづくりの実現に寄与するなどその教育研究成果を広く社会に還元することで、地域社会及び産業の持続的な振興、発展に寄与することを目的とする。」とある。

周南市教育委員会、周南市内小・中学校との連携をより深め、この「学校インターンシップ」を実施していく必要がある。

このことを踏まえ、また、今年度、多方面から出された振り返りコメント等を参考にし、周南市教育委員会、周南市内小・中学校、本学の三者の連携をより一層強固なものにしなければならぬと考える。

そして、周南市の学校教育発展のために、次年度以降、より良い「学校インターンシップ」に向けてさらに精進していく覚悟を持って臨みたい。

【註】

- 1) 学校ボランティアとは、学校の教育目標や学校の課題に対してお手伝いする目的で実施したもの。お手伝いの内容は、①保健体育授業 ②スポーツイベントでの運営補助 ③運動部活動 ④その他生徒への場面に応じた支援 である。
- 2) 学校インターンシップの概要は、本学シラバス 2022 年度「学校インターンシップ」から原文の抜粋である。

【参考資料】

- ・水崎佑毅 (2021) 「教員志望度からみた体育の模擬授業の効果に関する事例的検討」『徳山大学創立 50 周年記念論文集』、徳山大学経済学会、pp.197-208.
- ・中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」、文部科学省ウェブサイト、https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/tou shin/1315467.htm (2023 年 1 月 20 日閲覧).
- ・中央教育審議会「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」、文部科学省ウェブサイト、https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/tou shin/1365665.htm (2023 年 1 月 20 日閲覧).